東京外国語大学
留学生日本語教育センター論集　28：13～26，2002

文末表現「わけだ」の用法
――「はずだ」「ことになる」との比較――

横田 淳子
(2001.10.31 受)

1　はじめに

「わけだ」(以下、ワケダ) の基本的な意味は、ある事柄から筋道や道理に沿って考えていくともう一つの事柄にたどりつくが、話し手が述べることはそのような論理をたどったところから出てきたものであることを表明することである。このような意味は「はずだ」(以下、ハズダ) にも「ことになる」(以下、コトニナル) にもあり、日本語学習者にとっては使い分けが難しい。本稿では、日本語学習者にワケダとハズダ・コトニナルの違いをわかりやすく説明するために、筆者がおこなったワケダの5分類(1)にそって、どのような場合のワケダがハズダやコトニナルと言い換えられるのかを検討する。

2　先行研究に見られるワケダ・ハズダ・コトニナルの意味・機能

ワケダの5分類にそって、それぞれのワケダがハズダ、コトニナルと互換可能かどうかを検討する前に、ワケダ・ハズダ・コトニナルの基本的な意味・機能の共通点および相違点を従来の研究を基に把握しておく。具体的な細かい用法の違いに関しては4節で用例を見ながら検討することにする。

ワケダもハズダもコトニナルも、基本的な用法は、ワケダ・ハズダ・コトニナルのついた節は話し手がある事柄から論理的に考えた末に出てきた必然的な帰結であることを表明するものである。この点では三者は近似しているが、以下の点で相違がある。

2－1　断定と推論

最初に挙げられる大きな相違点は、ワケダとコトニナルは論理的帰結を少なくとも論理上は既定の事実であるとして断定しているのに対して、ハズダは論理的帰結を高い確信をもって推論しているだけで事実としては捉えていない点である。

このことを、森田・松木は、ワケダは「前提からの論理的帰結を示して断定する表現である」(2)のに対し、ハズダは「時間的・場所的隔たりや知識の不十分さなどから真実のところはわからないが、話し手の知る諸事実から推論すると当然

の帰結として間違いなくこうであると判断する表現」[3]で、「未知の帰結を推論する表現である」[4]と言っている。

寺村は、ワケダとハズダの相違点を、「『Qハズダ』は、…Qが未知で、その事実性が問われていることが引き金となっているのに対し、『Qワケダ』では、Qは事実としては既定、既知のことであるが、その事実がどうしてそうなのか、という問いに対して答えようとする心理が引き金になっている」[5]と言っている。つまり、ハズダは論理の帰結が事実であろうという話し手の高い確信を述べることに力点が置かれているのに対し、ワケダは論理の帰結が論理的筋道を経て出てきたものだという点に力点が置かれているというのである。

寺村はこのように述べながら、ハズダをワケダと一緒に「説明のムード」[6]に入れている。しかし、ハズダは「未知のQを推理する」という点がワケダやコトニナルと大きく異なるのであるから、ダロウ、ニチガイナイなどと同様に「概言のムード」に入れた方がふさわしいように思われる。ちなみに、森山はハズダをト思ウ、ニチガイナイ、ダロウとともに「不確実だが高い確信があること」を表現する形式として挙げている[7]。

2－2　主観性と客観性

ワケダ・ハズダの主観性・客観性に関しては、森田・松木は「どちらも主観的判断ではあるが、『はずだ』のほうが話し手の主観をより色濃く反映する。従って『はずだ』は、何らかの客観的事実をもとにしているとはいえ、あくまでも自分の推論ではそうなるというニュアンスが強く、予測実現への期待感や相手も同意させようとする気持ちを伴うことが多い」[8]としている。予測実現への期待感があるだけに、実現された事実が自分の予測と違う場合はそのような事実を不審に感じていることを表す表現ともなるが、このようなハズダの機能はワケダにはないものである。コトニナルについては、「既成の事実や成り行き、道理などから必然的にある結論が導き出されることを表す。『わけだ』との言い換えが可能だが、『わけだ』と違って主観的な要素が少なく、前提から必然的帰結へという推論そのものを非常に客観的に述べる表現」[9]だと言っている。

寺村は、「Qワケダは、前提Pからの論理的帰結としてQであることをいう点で、『Qコトニナル』と共通するところがあり、未知のQを推理するQハズダよりも、Qコトニナルとの互換の可能性が高い。しかし、その主観性という面で、ワケダはハズダとムードの助動詞としての共通する特徴をもつ」[10]と述べている。

ワケダ・ハズダ・コトニナルはいずれも論理的帰結であるということを表現しているが、ワケダは帰結の必然性を主観的に断定する表現、ハズダは帰結の必然性を推論する主観的表現、コトニナルは帰結の必然性を客観的に述べる表現であるとまとめられる。

3　ワケダの5分類

二つの事柄の間に筋道や道理があり、一つの事柄から筋道や道理に沿って考えていくともう一つの事柄にたどりつくが、ワケダがついた節は、そのような論理をたどったところから出てきた帰結であることを主張する表現だという点では、多くの研究者の論は一致している。しかし、ワケダが二つの事柄の関係を述べている表現であるためか、二つの事柄のみに注目してワケダの機能を解明しようとしているものが多い(11)。さらにその二つの事柄を原因・理由と結果として捉えているために、ワケダがつく節が時に原因・理由を表し、時に結果を表すという矛盾する現象に遭遇することになる(12)。

このような一見矛盾する現象を説明するためには、事柄の客観的な流れと話し手の認識の流れを区別し、事柄の客観的な流れではなく、話し手の認識の流れにしたがってワケダの用法を分類する必要がある。それは、ワケダは事柄の客観的な流れの帰結を表すものではなく、話し手の認識上の論理的帰結を表すものであるからである。話し手は事柄を認識したとき、論理的思考の流れをその事柄の結果の方向に働かすこともあれば、反対にその事柄の原因・理由を探る方向に働かすこともある。したがって、論理的帰結とは事柄の結果だけでなく、事柄の原因・理由も当然含まれることになる。すなわち、ワケダがつく節が表す論理的帰結とは事柄の原因・理由であることもあれば、結果であることもあるのである。

このことを明示するために、ＰとＱや、ＸとＹのように二つの事柄間の関係を問題とするのでなく、事柄Ｙ、事柄Ｙの原因・理由であるＸ、事柄Ｙの結果であるＺという三つの事柄を想定し、事柄の客観的流れをＸ→Ｙ→Ｚとした。次に、話し手の認識の流れに注目して、事柄Ｙを認識し、そこから論理を展開して結果であるＺに行くＹ→Ｚの流れ（図１の①）と、事柄Ｙを認識し、そこから論理を展開して原因・理由であるＸに行くＸ←Ｙの流れ（図１の②）をそれぞれ「結果を表す帰結用法」と「原因・理由を表す帰結用法」とした。さらに、事柄Ｙから出発して、その原因・理由であるＸに行き、事柄Ｘと事柄Ｙの関係を認めてから改めて事柄Ｙを納得するＸ⊂Ｙの流れ（図１の③）を「納得用法」とした。事柄

Yを別の視点・角度から見て、Y'と捉え直すY→Y'の流れ（図１の④）は「捉え直し用法」とした。ワケダは、話し手の認識の流れを示すそれぞれの矢印の先の事柄につくことになる。さらにもう一つ、以上の４つの基本用法から出てきたものであるが、本来の意味はほとんど失って、ただ、話し手が述べている事柄の裏にはいちいち口には出さないが様々なことがあるということを聞き手に示そうとする用法がある。このような終助詞的な用法を「派生的用法」（図１の⑤）とし、ワケダの用法を全部で５つに分類した。

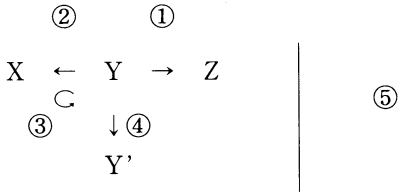

図１　話し手の認識の流れ

4　ワケダ・ハズダ・コトニナルの互換可能性の検討

横田（2001）のワケダの５分類にそって、それぞれのワケダがハズダ、コトニナルと言い換えが可能かどうかを検討する。

①　結果を表す帰結用法　Y→Z　（図１の①）

ハズダが基本的には話し手の推量に属するためか、ハズダには疑問形がない。「…わけですか」や「…ことになりますか」は可能であるか、「…はずですか」は言えない。

(1) 波がずいぶん荒いですね。今日は船が出せないわけですか。

×はずですか。○ことになりますか。

次の(2)から(4)のように、論理的に考えていけば事柄の結果が必然的に出てくる未知の結果Ｚを述べる場合には、ワケダ、ハズダ、コトニナルのどれでも使えるが、意味が微妙に異なる。ワケダは話し手が論理的に考えた帰結であることを主張し、ハズダは確信度の高い論理的推量であることを含意している。コトニナルは論理の結果を客観的に述べる表現になる。

(2) この料金でサービスを提供できるのは売手Ａだけですが、買手の方はＣもＤもサービスを利用したいと考えます。したがって需要が供給を上まわる

わけです。(藤村)

○はずです。○ことになります。

(3) 時差が四時間あるから、日本時間のちょうど正午につくわけだ。(森松)

○はずだ。○ことになる。

(4) なにしろコレラの潜伏期間は短いのである。その二人がいつ、どこで羊かんを食べるか分からないが、今日中だとすれば、明日か明後日までには、コレラ特有の下痢が始まるわけだ。(劉)

○はずだ。○ことになる

結果Zが既に確認した過去の事実であれば推量の余地がないから、ハズダは使えない。しかし、過去のことでも話し手が事実として把握していない未確認のものであれば推量できるから、ハズダが使える。(5)のように、「正午についた」人が他人の場合、「正午についた」かどうかは話し手にとっては未確認の事柄になり、ハズダが使える。ワケダの場合は、「正午についた」人が自分である場合、つまり既知の事実の場合にも使えるし、他人である場合、つまり未確認の事柄の場合にも使える。コトニナルは「結果を表す帰結用法」の過去の事実には使うことができない。

(5) 時差が四時間あるから、日本時間のちょうど正午についたわけだ。

○はずだ。×ことになる。

Zが既知の事実である場合、つまり、話し手が事実として既に確認している事柄については推量の余地がないから、ハズダは使えない。そのため、(6)ではワケダをハズダには言い換えられない。(6)においてコトニナルが使えるのは、結果を表す帰結用法ではなく、過去の事実の「捉え直し用法」になるからである。「体重が今週は52キロになっていた」という事実を、「52キロ－49キロ」という計算をして「3キロ太ってしまった」と捉え直している表現になる。

(6) 体重をはかったら52キロになっていた。先週は49キロだったから、一週間で3キロも太ってしまったわけだ。(辞書)

×はずだ。○ことになる。

コトニナルは論理的帰結として客観的に認められるものでなければならない。以下のようなものは論理的客観的な帰結として常に認められるものではないので、コトニナルが使えない。

(7) 私は昔から機械類をさわるのが苦手です。だから未だにワープロも使えないわけです。(辞書)

×はずです。×ことになります。

「未だにワープロも使えない」ことは「昔から機械類をさわるのが苦手」なことの論理的客観的帰結として常に成立することではないので、コトニナルは使えない。また、「未だにワープロも使えない」ことは推量の余地がない自分のことなので、ハズダも使えない。

(8) 彼女は中国で3年間働いていたので、中国の事情にかなり詳しいわけである。(辞書)

○はずである。×ことになる

これも(7)と同様に、「中国で3年間働いていた」ことの論理的客観的帰結として常に「中国の事情にかなり詳しい」ことがあるわけではないので、コトニナルは使えない。ワケダは「中国で3年間働いていた」ことの結果として「中国の事情にかなり詳しい」という論理の流れを述べているが、ハズダは「彼女が中国で3年間働いていた」という事実から「中国の事情にかなり詳しい」だろうという話し手の確信度の高い推量を述べている。

② 原因・理由を表す帰結用法　X←Y（図1の②）

事実が既に確認されている場合、推量は成り立たないからXにハズダは使えない。したがって、「原因・理由を表す帰結用法」ではワケダをハズダに言い換えることはできない。ただし、ハズダを使って、原因・理由としてではなく関連事項として、未確認・不確かな過去の事実を推量することはできる。用例(9)では、ワケダの場合は、話し手が「学校の中が静か」なことから論理を展開させてその原因・理由である「冬休みに入った」事実を導き出し、論理的帰結として、それを主張しているが、ハズダの場合は、「学校の中が静か」なことと関連して、不確かな事実である「冬休みに入った」ことを推量しているに過ぎない。そのため、「たしか」などの副詞がよく一緒に使われる。用例(10)から(12)も同様に、ハズダを使うことができるが、その場合は、「原因・理由を表す帰結用法」ではなく、単に関連した事柄を推量し、付け加えているだけである。

コトニナルは事柄の客観的な流れの方向X→Y→Zにしか使えないため、X←Yという流れになる「原因・理由を表す帰結用法」では、ワケダをコトニナルに言い換えることはできない。

(9) 学校の中が静かですね。――あ、冬休みに入ったわけですね。(松岡1)

○はずですね。×ことになりますね。

(10) 今年の米のできが良くなかった。冷夏だったわけだ。(辞書)

○はずだ。×ことになる。

(11) 彼女は猫を3匹と犬を1匹飼っている。一人暮しで寂しいわけだ。(辞書)

○はずだ。×ことになる。

(12) 波がずいぶん荒いでしょう。台風が近付いているわけです。

○はずです。×ことになります。

③ 納得用法 Y→X→Y (図1の③)

森田・松木は、ワケダの用法の一つとして「ある事実について、どうしてそうなのか疑問に思っていたところ、その答えとなるような他の事実を知って納得した、という状況を表す。事の真相を知って、現状が当然の帰結であったと悟る場合」の用法を挙げ、「この用法の場合、『はずだ』と言い換えることができる」と述べている[13]。

寺村も、ハズダの項で、「ある事実(Q)について、どうしてそうなのかと思っていたら、その疑問に答えるための事実(P)——Pならば当然Qだと了解される、そういう事実——を知った、という状況で使われる」場合、「ハズダはワケダと言いかえることができる」と述べている[14]。森田・松木と寺村がそれぞれの用例として上げているものは(13)から(17)で、ワケダとハズダを入れ替えても意味は違わない。

(13) あかないわけです。かぎが違っているのですから。(森松)

○はずです。×ことになります。

(14) こっちの子供たちが泳ぎが上手なわけだわ。お腹にいるときから泳いでるんですもの。(森松)

○はずだわ。×ことになるわ。

(15) 一人でこうしていれば全く気楽だな。結婚なんか全くばからしくなるわけだな。(森松)

○はずだな。×ことになるな。

(16) アノ大統領ハエンギガウマイハズダ。モト俳優ダッタソウダ。(寺村)

○わけだ。×ことになる。

(17) フランスデ中学マデイカレタノデスカ。道理デ、フランス語ガ流暢ナハズデスネ。(寺村)

○わけですね。×ことになりますね

コトニナルは二つの事柄の結びつき・関係を認めるというよりも論理的な思考

の帰結を客観的に述べる用法であり、事実を認識してその原因・理由を知って二つの事柄の関係を認める「納得用法」の機能はない。したがって、「納得用法」にはコトニナルは使えない。

「納得用法」の場合、森田・松木や寺村をはじめ、多くの研究者が指摘するようにワケダとハズダを入れ替えても意味に差がないが、以下の用例では、ワケダをハズダには言い換えにくい。

(18) 山本さん、結婚したらしいですよ。——ああ、そうだったんですか。それで最近いつもきげんがいいわけだな。(辞書)
　×はずだな。×ことになるな。

(19) 隣の鈴木さん、退職したらしいよ。——そうか。だから平日の昼間でも家にいるわけだ。(辞書)
　×はずだ。×ことになる。

(20) そんなに飲んだんですか。それでさっさと寝てしまったわけですね。
　×はずですね。×ことになりますね。

(18)と(19)はグループ・ジャマシイ（1998）において、ワケダの用法の中の「納得」に分類されている用例であり、意味的にも、話し手は事柄Yを認識し、なぜそうであるのかに思いをめぐらし、その原因・理由Xを知り、改めて事柄Yに納得しているので、「納得用法」に属するものと考えられる。グループ・ジャマシイ（1998）の「納得」に分類されている他の用例は(21)から(23)であるが、これらはワケダをハズダと言い換えられる。

(21) 彼女は3年もアフリカにフィールドワークに行っていたそうですよ。——そうですか。道理で日本の状況がよくわかっていないわけですね。(辞書)
　○はずですね。×ことになりますね。

(22) あ、鍵が違うじゃないか。なんだ。これじゃ、いくらがんばっても開かないわけだ。(辞書)
　○はずだ。×ことになる。

(23) 田中さん、一か月で4キロやせようと思ってるんだって。なるほど、毎日昼ご飯を抜いているわけだわ。(辞書)
　○はずだわ。×ことになるわ。

同じ「納得用法」に属すると思われる用例なのに、ある用例はワケダをハズダと言い換えられ、他の用例は言い換えられないのはなぜであろうか。用例(18)か

ら(20)には「それで」や「だから」がある。「それで」や「だから」がある場合は、ワケダをハズダには言い換えにくいのではないだろうか。「それで」や「だから」がある場合、「それで」や「だから」が結果を導き出す言葉であるだけに、「納得用法」の流れY→X→Yの中の特にX→Yの部分が強調され、その結果、ワケダの用法としては「結果を表す帰結用法」と同じ機能を担うことになるのではないだろうか。そして、「結果を表す帰結用法」においては、推量の可能性のない既定の事実についてはハズダが使えないから、(18)から(20)のように話し手が事実として既に確認している事柄についてはハズダが使えないのではないだろうか。

(24) 最近円高が進んで、輸入品の値段が下がっている。だから洋書も安くなっているわけだ。(辞書)

○はずだ。×ことになる。

筆者は横田 (2001) で、用例(24)を、「洋書が安くなっている」ことは話し手が既に知っている事柄であると解釈し、Y→X→Yの「納得用法」に分類したが、これも「だから」が入っているから、「結果を表す帰結用法」とするほうが妥当なのであろう[15]。この場合にハズダが使えるのは、「洋書が安くなっている」という事実を話し手がまだ認識していず、「最近円高が進んで、輸入品の値段が下がっている」ことの結果として「洋書も安くなっている」ことを推量する場合である。「結果を表す帰結用法」で検討したように、「結果を表す帰結用法」の場合は、未知の事柄についてはワケダもハズダも使うことができるのである。

④ 捉え直し用法 Y → Y'(図1の④)

「捉え直し用法」は事実を別の視点から言い直したり、まとめたりしているもので、推論ではない。したがって、ハズダは使えないが、コトニナルは使える。

(25) 破格の低料金でニューヨーク－ロンドン間を飛ぶレイカー航空の“空飛ぶ通勤列車”スカイ・トレーンの一番機が二十六日夜、ニューヨークのケネディ国際空港を飛び立った。片道運賃は約二万八千円で、他社の六割五分引き。米国と欧州との間がまた近付いたわけだが、これは米英航空業界のダンピング合戦の始まりでもある。(寺村)

×はずだが、○ことになるが、

(26) 一人前の大人になって、いまさら昆虫採集などという役にも立たないことに熱中できるのは、それ自体がすでに精神の欠陥を示す証拠だというわけだ。(森松)

×はずだ。○ことになる。

(27) 十八の春、戯曲を書きはじめた。葬式をしたかったのだ。私にとって芝居は葬式なのだ……私は九本の芝居を書いた。死ねなかった自分を芝居の中で九度殺し、九度弔ったわけだ。(松岡２)

×はずだ。○ことになる。

(28)「待ってくださいよ」と、梅木は手帳を出した。

「つまり、三月からご主人はマージャン徹夜が始まったわけですね？」

「そうなんです」(劉)

×はずですね。○ことになりますね。

(29) 彼女の父親は私の母の弟だ。つまり彼女と私はいとこ同士なわけだ。(辞書)

○はずだ。○ことになる。

用例(29)でハズダが使えるのは、森山の言う「発話の現場状況が、『論理的根拠による判断』と齟齬を来しつつあるような状況」[16]の場合である。論理的には彼女と私はいとこ同士であるが、現実にはいとことして扱われていないような状況にあり、それに対して、変だ、おかしいという気持ちをもつ時に使われる。ハズダのあとに、「それなのに…」のような気持ちがくる。この機能はワケダにはなく、ワケダとハズダでは意味が異なってくる。

以上の検討から、「捉え直し用法」ではワケダはコトニナルとは言い換えられるが、ハズダとは同じ意味では言い換えられないとまとめられる。

⑤　派生用法（図１の⑤）

話し手にとっては常識や既成の事実であると考えるものにワケダをつけて言う用法で、終助詞のように話し言葉でよく使われ、話し手自身無意識に使っていることも多い。このような終助詞的用法では、ワケダはハズダやコトニナルと言い換えられない。

(30) こうして二人は結婚して、幸せに暮らしたわけです。(森松)

○はずです。×ことになります。

ハズダを使うと、話し手が「二人は結婚して、幸せに暮らした」と推量することになり、意味が違ってくる。

(31) わたしは国史を専門にしているわけですが、わたしのような文献を扱う者の立場からすれば、もっと史料を大切にすべきではないかと思うんです。(森松)

×はずですが、×ことになりますが、

用例(32)のワケダの場合は、4人とも車で来ることを話し手は既成の事実として把握していて、「聞き手も知っているように」という意味が含まれる。ハズダの場合は、4人とも車で来るかどうかは話し手にとって未知のことになり、意味が違ってくる。コトニナルの場合は、コトニナルのもう一つの用法である「事態の推移」を表し、やはり意味が違ってくる。

(32) 4人とも車で来るわけだから、うちの前にずらっと4台路上駐車することになるね。(辞書)

○はずだから、○ことになるから、

5 まとめ

前節での検討を表にまとめる。ワケダ・ハズダ・コトニナルがつく節を仮にAとして、Aが話し手にとって未知であるかどうか、未確認であるかどうかなどによって、ワケダの5分類をさらに詳細に分け、ハズダやコトニナルと言い換えられるか否かを記した。ワケダの用法と意味がほとんど変わらず、ハズダやコトニナルと言い換えが可能な場合には○をつけ、不可能な場合には×をつけた。ワケダの用法と意味は異なるが、ワケダのかわりにハズダやコトニナルを使うことができるものには×の後に（○）を加えた。

	A	ワケダ	ハズダ	コトニナル
疑問形		○	×	○
① 結果を表す帰結用法	未知 既知 未確認過去	○ ○ ○	○ × ○	○ ×（○） ×
②原因・理由を表す帰結用法	既知 未確認	○ ○	× ×（○）	× ×
③納得用法		○	○	×
④捉え直し用法		○	×（○）	○
⑤派生用法		○	×（○）	×（○）

ワケダとハズダとコトニナルがすべて使えるのは、「結果を表す帰結用法」の中でAが未知の場合だけである。その場合であってもニュアンスは異なる。ワケ

ダはある事柄からの当然の論理的帰結として導き出されたもので、事実として断定的に述べてもいいと話し手が考える場合に使われ、ハズダは帰結である事柄が時間的・空間的に離れていたり、他人の気持ちだったりして確認できず、断定的には述べられない場合に使われる。コトニナルは話し手の気持ちを表さず、できるだけ主観を排して、客観的に述べようとするときに使われる。

AワケダをAハズダやAコトニナルとすることができる場合でも、その逆は必ずしも真とはならず、AハズダをAワケダには換えられないことがある。

(33) 寒冷前線が南下しているので、来週には気温が低くなるはずです。

天候のように不確定要素が多いものについて述べる場合は断定的に言えないので、ハズダをワケダには換えられない。

「原因・理由を表す帰結用法」のAワケダはハズダやコトニナルと言い換えられない。「納得用法」のAワケダはコトニナルとは言い換えられないが、ハズダとはほとんど意味が変えずに言い換えられる。ただし、「それで、Aワケダ」や「だから、Aワケダ」の場合は、「それで、Aハズダ」や「だから、Aハズダ」とは言い換えにくい。「捉え直し用法」のAワケダはコトニナルと言い換えられる。「派生用法」のAワケダはハズダやコトニナルと言い換えられない。

6　おわりに

横田（2001）のワケダの5分類にそって、どのような場合のワケダがハズダやコトニナルと言い換えられるのかを検討し、まとめたが、今後は日本語学習者のワケダに関する誤用例を見て、上記のまとめで納得のいく説明ができるのかどうかを検討していきたい。

注

(1) 横田（2001）
(2) 森田・松木（1989）203ページ。
(3) 同上　255ページ。
(4) 同上　203ページ。
(5) 寺村（1986）277ページ。
(6) 寺村（1986）は「二次的ムードの助動詞」を「概言のムード」と「説明のムード」の二つに分けている。
(7) 森山（1995）

(8) 森田・松木（1989）203ページ。
(9) 同上　205-206ページ。
(10) 寺村（1986）283ページ。
(11) 寺村（1986）、奥田（1992）、松岡（1987、1993）、劉（1996）、グループ・ジャマシイ（1998）など。
(12) 奥田（1992）、松岡（1987、1993）、劉（1996）。
(13) 森田・松木（1989）198ページ。
(14) 寺村（1986）271-272ページ。
(15) 用例(24)の出典であるグループ・ジャマシイ（1998）では、「独話型」の「結論」に分類されている。
(16) 森山（1995）174ページ。

参考文献

奥田靖雄（1992）「説明（その２）――わけだ――」『ことばの科学５』むぎ書房
グループ・ジャマシイ（1998）『日本語文型辞典』くろしお出版
寺村秀夫（1986）『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版
藤村知子（2000）「説明文における『ワケダ』の使用例とその機能」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』26号
松岡　弘（1987）「『のだ』の文・『わけだ』の文に関する一考察」『言語文化』24、一橋大学語学研究室
――――（1993）「再説－『のだ』の文・『わけだ』の文」『言語文化』30、一橋大学語学研究室
森田・松木（1989）『日本語表現文型』アルク
森山卓郎（1995）「ト思ウ、ハズダ、ニチガイナイ、ダロウ、副詞～ϕ」『日本語類義表現の文法（上）単文編』くろしお出版
横田淳子（2001）「文末表現『わけだ』の意味と用法」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』27号
劉　向東（1996）「『わけだ』文に関する一考察」『日本語教育』88号

用例出典

(辞典)　　グループ・ジャマシイ（1998）
(寺村)　　寺村秀夫（1986）

（藤村）　　藤村知子（2000）
（松岡１）　松岡　弘（1987）
（松岡２）　松岡　弘（1993）
（森松）　　森田・松木（1989）
（劉）　　劉　向東（1996）
なお、出典が明記されていないものは筆者の作例である。

The Usage of *wakeda*
—— Comparison with *hazuda* and *kotoninaru* ——

YOKOTA, Atsuko

The basic meaning of *wakeda* is to express the speaker's attitude of recognizing that there is a logical relationship between two events. Since *hazuda* and *kotoninaru* also have such a meaning, it is difficult for Japanese learners to use them properly. In order to explain the difference between the usage of *wakeda* and that of *hazuda* and *kotoninaru,* sentences belonging to the five categories of *wakeda* are analyzed from the viewpoint of whether *wakeda* can be replaced by *hazuda* or *kotoninaru.*

Basically, there are the following differences among the three expressions. *Wakeda* expresses subjective conclusion out of logical thinking, *hazuda* expresses inference out of logical thinking, and *kotoninaru* expresses objective conclusion out of logical thinking.

Hazuda or *kotoninaru* can replace *wakeda* of the first category, in which the speaker expresses an attitude of recognizing the result of an event. Neither *Hazuda* nor *kotoninaru* can replace *wakeda* of the second category, in which the speaker expresses an attitude of recognizing the cause of an event. *Wakeda* of the third category, in which the speaker expresses an attitude of understanding of the relationship between a cause and a result, can be replaced by only *hazuda. Wakeda* of the fourth category, in which the speaker presents another interpretation of an event, can be replaced by only *kotoninaru.* Neither *Hazuda* nor *kotoninaru* can replace *wakeda* of the fifth category, which is used in casual conversation in order to give an emphasis to a fact when the speaker thinks the hearer does not know it.